飛鳥藤原第117次調査　現地説明会資料　2002.3.23

（藤原宮大極殿院東回廊・東殿・大型礎石建物）

奈良文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部

藤原宮は持統８年（694）から和銅３年（710）まで営まれた、持統・文武・元明三代の都です。この場所が、藤原宮であることがわかったのは、今から68年前、1934年12月のことです。1943年まで続けられた日本古文化研究所の調査によって、宮の中枢部（大極殿院・朝堂院）の規模と構造が判明し、藤原宮および古代宮都研究の基礎資料となっています。

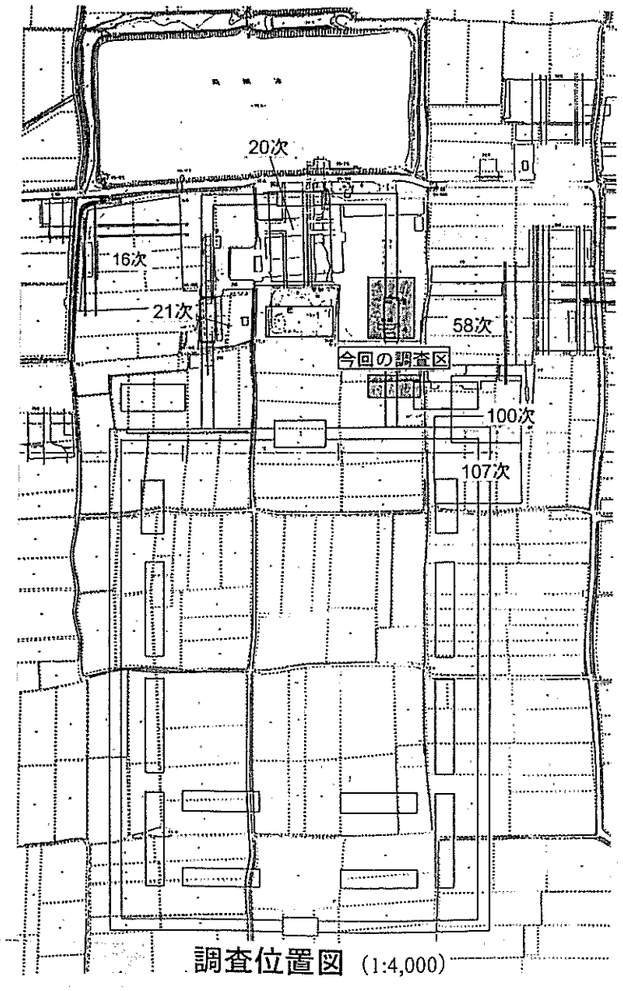
奈文研は1970年以来、藤原宮の調査を進めてきましたが、中枢部については日本古文化研究所の成果によってきました。しかし、大極殿院の整備に関連する部分的な調査の結果や、他の宮殿の中枢部の様子が分かってきた中で、古文化研究所の調査成果には、それが戦前の調査であるための限界（発掘方法と測量技術）があることもわかってきました。

そこで、一昨年来、中枢部についての調査を開始し、朝堂院北東隅部（第100次）、朝堂院東第一堂（第107次）に続く三回目として、今回は大極殿院東回廊地区を対象としました。

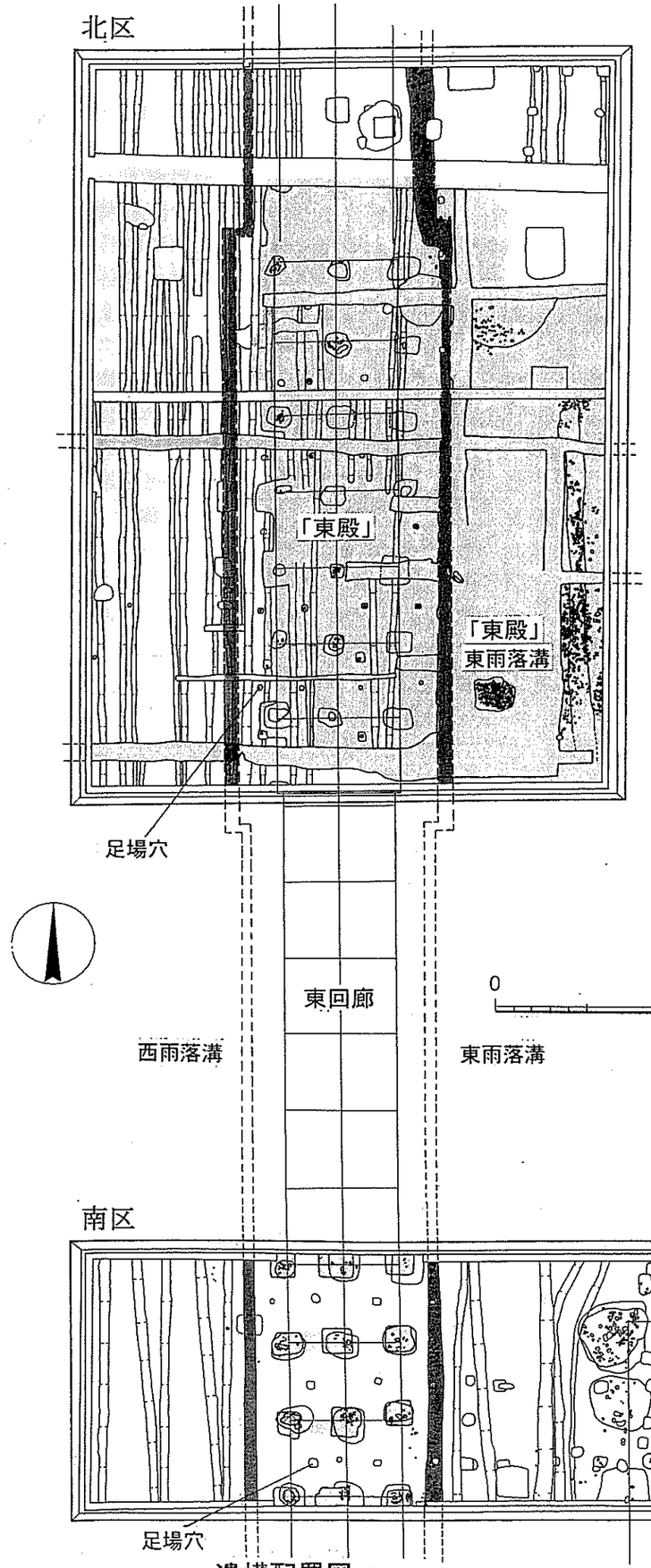
大極殿院について古文化研究所の報告は、大極殿は桁行７間（約34m）梁行４間（約18m）で、それを囲む回廊の北半は単廊、南半は複廊であるとしています。そして、東・西回廊に桁行７間、梁行４間の礎石建物（「東殿」「西殿」）、北回廊に桁行７間、梁行３間の礎石建物（「北殿」）が建ち、南回廊中央に基壇規模東西約30m、南北約15mの南門を復原しています。

奈文研は大極殿院整備に関わる部分的な発掘（第20・21次調査等）の成果から、宮や朱雀大路の中軸線との関係から大極殿は桁行９間の可能性が高いこと、「確認」されている礎石位置と建物規模に従う限り、建物と回廊との取り付きも含めて、左右対称にならない問題点があることを示しました。今回の調査は、その解決の手がかりを得ようとするものです。

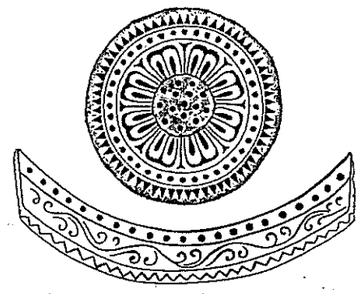
調査は南区と北区とに分け、南区で大極殿院東回廊南半と内裏東外郭に建つ大型礎石建物、北区で東回廊北半と「東殿」を検出しました。調査は2001年10月９日に開始し、調査面積は合わせて1755㎡です。



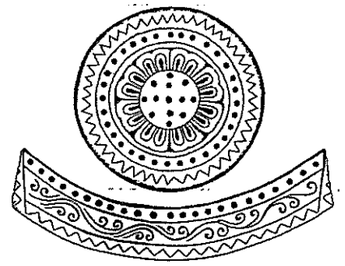
調査位置図（1:4,000）



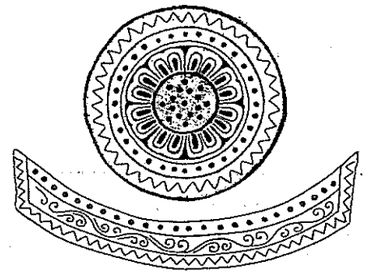
遺構配置図（1:300）　※淡い網は日本古文化研究所のトレンチ



軒丸瓦6273B－軒平瓦6641E

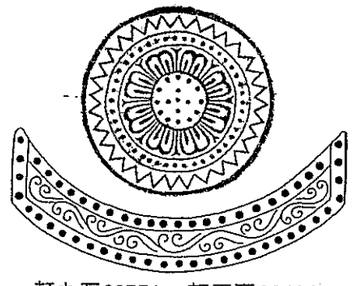


軒丸瓦6281A－軒平瓦6641C



軒丸瓦6281B－軒平瓦6641F

大極殿院所用の軒瓦



軒丸瓦6275A－軒平瓦6643C

大型礎石建物所用の軒瓦

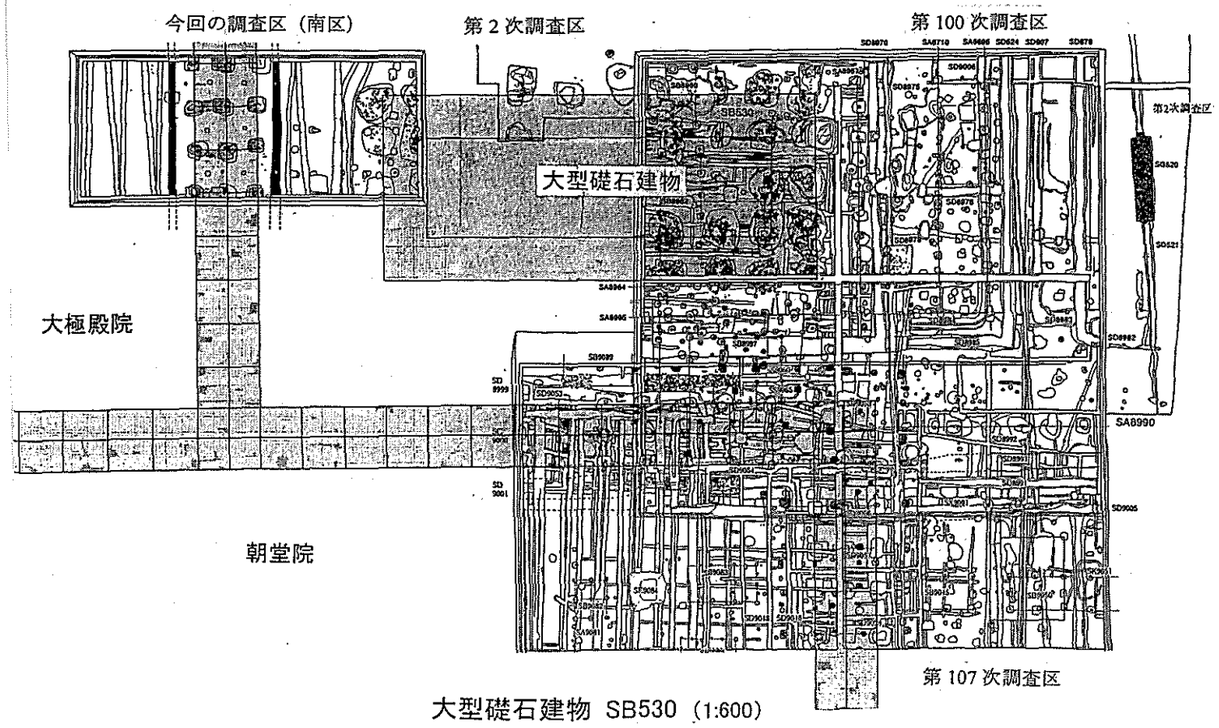
＜大型礎石建物SB530は桁行９間、東楼と呼ばれた＞

大極殿院回廊の東、朝堂院回廊の北に大きな礎石建物があることは、古文化研究所の調査でわかっていました。奈文研の第２次調査（1970年）と第100次調査によって、桁行６間以上、梁行４間の四面庇付きの東西棟建物と判明しましたが、今回、建物の北西隅にあたる６基の礎石据付掘形・抜取穴を検出したことで、規模が桁行９間と確定しました。

礎石据付掘形は一辺３～４ｍと巨大で、深さ50cm以上。礎石はすべて抜き取られ、抜取穴の底に人頭大の根石が残っています。これまでの調査で出土している礎石は１ｍ強の厚さを持つ巨石ですから、基壇はかなりの高さをもっていたでしょう。基壇外装、雨落溝については、これまでと同様発見されていません。それは、周辺が建物へ向かってせり上がるように造成されていたためだと思われます。基壇の周りからは、後に再堆積した多量の瓦が出土しました。この建物に葺かれた軒瓦も特定できています。

礎石抜取穴が大きいため柱位置が決めにくく、柱間はこれまでは桁行、梁行ともに15.5尺等間に割り付けてきましたが、判明した全体像から検討すると、側柱と入側柱の掘形が近接していて、身舎が16尺（4.8m）等間、庇の出が14尺（4.2m）である可能性が高いことがわかりました。とすると、東妻の柱列が朝堂院東回廊の西側柱列に、西妻の柱列は朝堂院北回廊の東から10間目に揃い、建物の西妻と大極殿院東回廊、建物の南側柱列と朝堂院北回廊の距離が等しい整然とした配置になっていることがわかります。そして、建物の規模は桁行総長140尺（約42m）、梁行総長60尺（約18m）に復原できます。この規模は、桁行を９間とした場合の大極殿の推定規模（桁行149尺、梁行66尺）に次ぐもので、逆に、藤原宮の中枢建物である大極殿が、桁行９間であることは疑いないことになります。

この建物は、構造と規模、位置からして、「東楼」と呼ばれた建物にあたるとこれまでも考えられていました。『続日本紀』によれば、慶雲４年、元明天皇が即位の直前に、八省の長官などに対して、亡き文武天皇の遺詔に従って自らが天皇になることを伝えたのが「東楼」であり、大極殿に準ずる格式をもった建物です。



大型礎石建物 SB530（1:600）

＜大極殿院東回廊は北も南も複廊であった＞

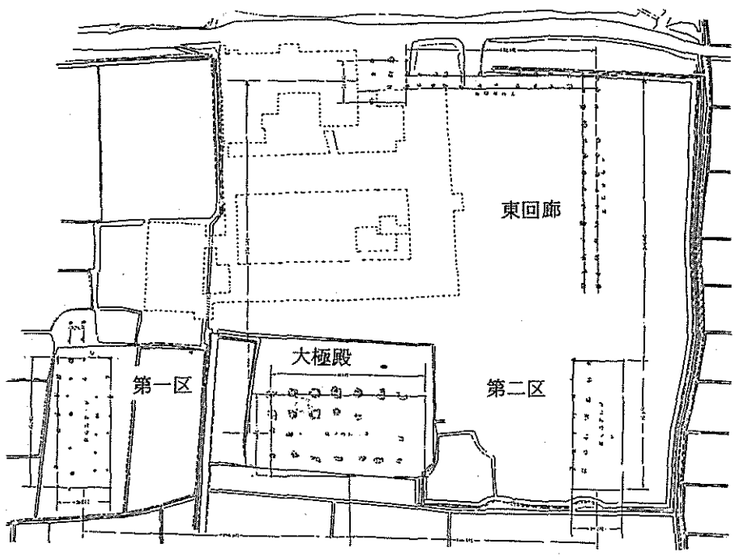
大極殿院の東回廊南半については、南区で３間分12カ所の礎石位置を確認しました。西側柱列に２個残っている礎石は、いずれも古文化研究所が調査したものの再確認で、両礎石間が南から数えて６間目にあたります。礎石は平面0.7×1.6m、厚さ0.6m。花崗岩自然石の上面を平坦に整えています。回廊礎石列の西２列については礎石据付掘形が明瞭にみえますが、東の一列については痕跡的です。礎石抜取穴の底には拳大の根石が残っています。柱間の中央にある３列の柱穴列は、足場穴と考えられます。回廊雨落溝は東、西とも素掘りで、幅0.6m、深さ0.2～0.3m。礎石との関係から回廊の軒出は６尺（約1.8m）で、回廊の基壇高は１尺（約30cm）と推定できます。東回廊南半は、古文化研究所の成果通り、梁行２間の複廊で、柱間は桁行が14尺（約4.2m）、梁行が10尺（約3.0m）であって、朝堂院回廊と同じ規模・構造であることがわかりました。

回廊基壇の内側（大極殿院内部）は黄色山土で整地され、回廊基壇土を挟んで、外側は小石混じりの土で整地されています。この関係は、北区までほぼ一直線に続いています。

北区は、その北端で東回廊北半を２間分は確認できると考えて設定しましたが、そこでは東回廊北半の礎石や据付掘形は見つかりませんでした。しかし、緻密な粘土を積み重ねた回廊基壇土が、南区で検出した回廊基壇と同じ約10mの幅で確認できました。そして、その西側には黄色土による整地があり、東側には幅１mの南北溝が検出されました。溝には多量の瓦が含まれ、北区北端から約９ｍでとぎれていて、回廊東雨落溝と考えられます。古文化研究所は東回廊北半については、「東殿」の西から２間目に取り付く単廊と復原していますが、回廊基壇は「東殿」の西端にほぼ揃う位置までの幅を持っているのです。したがって、東回廊北半は古文化研究所が復原する単廊の西側に、もう１間加えた形での複廊であったことは明かです。

＜「東殿」は東門である＞

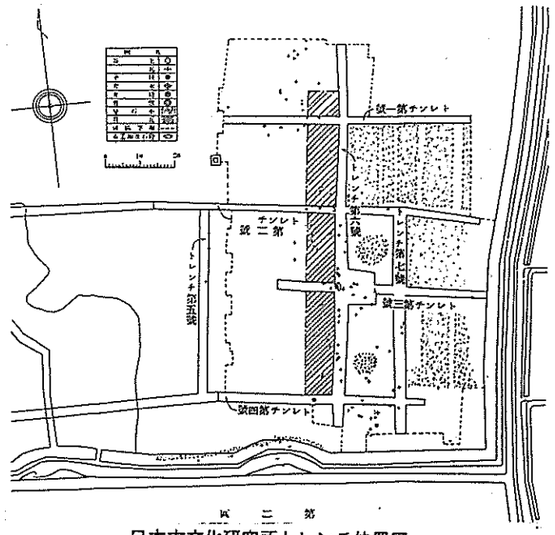
古文化研究所は1934年12月に始まった第一区で、７間×４間の大殿堂址（西殿）を発見したことをうけて、年明けの１月～３月、大宮土壇を挟んで対称の位置にある当時小学校の校庭であった場所を調査しています。これが第二区であり、今回の北区にあたります。調査はその後、４月～５月に大宮土壇に及び、そこで大極殿を発見し、夏休みの７月に第二区の北の運動場で東回廊址を、翌年１月、西回廊址を確認したのち、調査は朝堂院地区へ移っていきました。



日本古文化研究所の成果

古文化研究所の第二区の調査は、縦横に深いトレンチをのばし、「東殿」を中心に面的に広く掘り下げています。その結果、礎石の根石を２列12カ所確認し、その東には瓦堆積、バラス敷の存在を確認しただけでしたが、対称位置にあたることから「西殿」と同じ規模の建物を復原しています。

北区は、旧鴨公小学校時代の攪乱も多く、遺構の残り具合はよくありません。今回古文化研究所の確認した「東殿」の根石のうち、６カ所については再確認できました。それらには礎石据付掘形も確認でき、その他４カ所については礎石据付掘形だけを検出しましたが、他は痕跡的な状況です。しかし、回廊基壇土とよく似た基壇土を約11ｍの幅で確認し、その東に南北溝を検出しました。南北溝は「東殿」礎石列の西から２列目の東約６ｍにあって、それ以東には大極殿院外側の整地土が広がっています。古文化研究所のいうバラス敷とは、この大極殿院外側の整地土に詰められたバラスのことでした。



日本古文化研究所トレンチ位置図
（『藤原宮阯伝説地高殿の調査 一』より転載）

この結果、「東殿」は古文化研究所が想定した７間×４間の奥行きのある殿堂址ではなく、梁行２間の幅の狭い総柱建物と考えなければならないのです。また、南区で確認した回廊の礎石位置から「東殿」の礎石位置までの距離は、回廊の桁行柱間では割り切れませんから、回廊がそのまま延びていることも考えがたいことです。

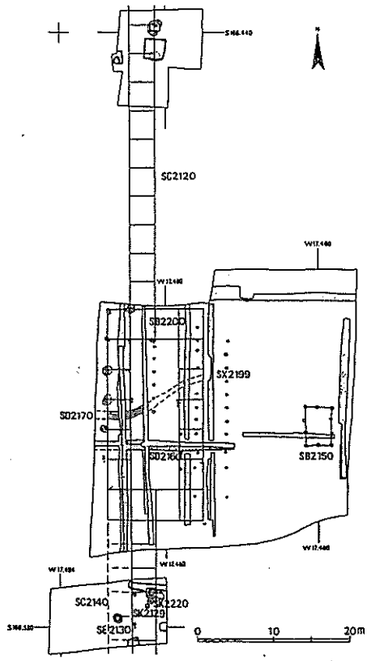
基壇の東で検出した南北溝は「東殿」の東雨落溝です。溝は素掘りで幅0.6m、深さ0.3ｍ。北では「東殿」の北妻の北約1.5mの位置で、西に接する東回廊東雨落溝につながっています。西雨落溝・基壇縁については検出されませんでしたが、想定位置周辺には、大極殿院内部の整地土の上に凝灰岩の細片や粉末が帯状に堆積しています。ですから、「東殿」の基壇外装は凝灰岩によるものと推定できます。

「東殿」の規模については、棟通りと東雨落溝との距離が回廊よりも約２尺（約0.6m）広いことから、梁行は２間で柱間は11～12尺、軒出は７～８尺と考えられます。桁行は柱間が14尺（4.2m）等間で、東雨落溝が「東殿」の北から６間目まで確認されますから６間以上で、「西殿」を参考にすると７間でしょう。いずれにしても、複廊が取り付く梁行２間の総柱建物は、構造的には門ですから、「東殿」は大極殿院東門と呼ぶべき建物です。

＜まとめ：大極殿院には四方に門がある＞

調査の結果、大極殿院東回廊南半は梁行柱間10尺（約３ｍ）、桁行柱間14尺（約4.2m）の複廊で、単廊とされた北半についても同様であることが確かめられました。また、「東殿」は回廊と棟通りを揃えた梁行２間（柱間11～12尺）の総柱建物であり、構造的には門にあたることがわかりました。なお、出土遺物の大半は瓦類であり、土器等はほとんどありませんでした。これはこの空間の性格からすれば当然のことでしょう。軒瓦には大型礎石建物の軒瓦であることが判明している組み合わせのほかに、３種の組み合わせがあります。３種は、いずれも大極殿院内で使われたものです。

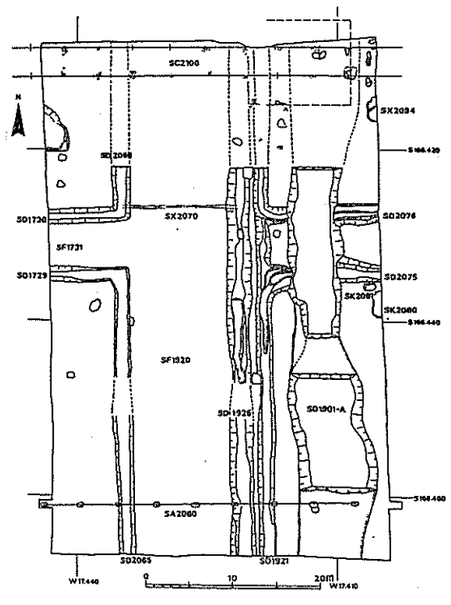
「東殿」の成果はこれまでの調査とも矛盾しません。「西殿」・西回廊（第21次調査）では確実な根石は西の２列であること、「西殿」は桁行14尺、梁行11尺であることを確認していますし、西回廊北半の西側にもう１列回廊礎石列を想定する余地があります。したがって確実な礎石位置をもとにすれば、「東殿」・東回廊と全く同じ形であった可能性が高いのです。しかも、その場合には、懸案であった大極殿院の中軸線と先行条坊朱雀大路の中軸線は一致し、大極殿院は左右対称に復原できるのです。「北殿」・北回廊（第20次調査）では、古文化研究所の梁行３間の「北殿」の南側柱列が確認されていませんから、梁行２間（柱間11尺）の「北殿」が想定できますし、単廊の北回廊の北にもう１列回廊礎石列を想定すれば「東殿」・東回廊と同じ構造になります。



第21次調査遺構配置図（1:500）

以上の成果と検討から、藤原宮の大極殿院は、桁行９間、梁行４間の四面庇付き礎石建物の大極殿を囲んで、朝堂院と同じ規模の複廊の回廊がめぐり、回廊には、朝堂院へ通じる南門と内裏地区へ通じる東門、西門、北門の３門が設けられていたと復原できます。

大極殿院東西回廊間は棟通りで約118m、東西の中心は大極殿の中心を通り、先行条坊朱雀大路の中軸線に揃います。北回廊と南回廊（朝堂院北回廊）間は同じく約159mとなり、南北の中心は「西・東殿」の３間目の礎石位置付近にあって、大極殿の北入側柱付近にあたります。



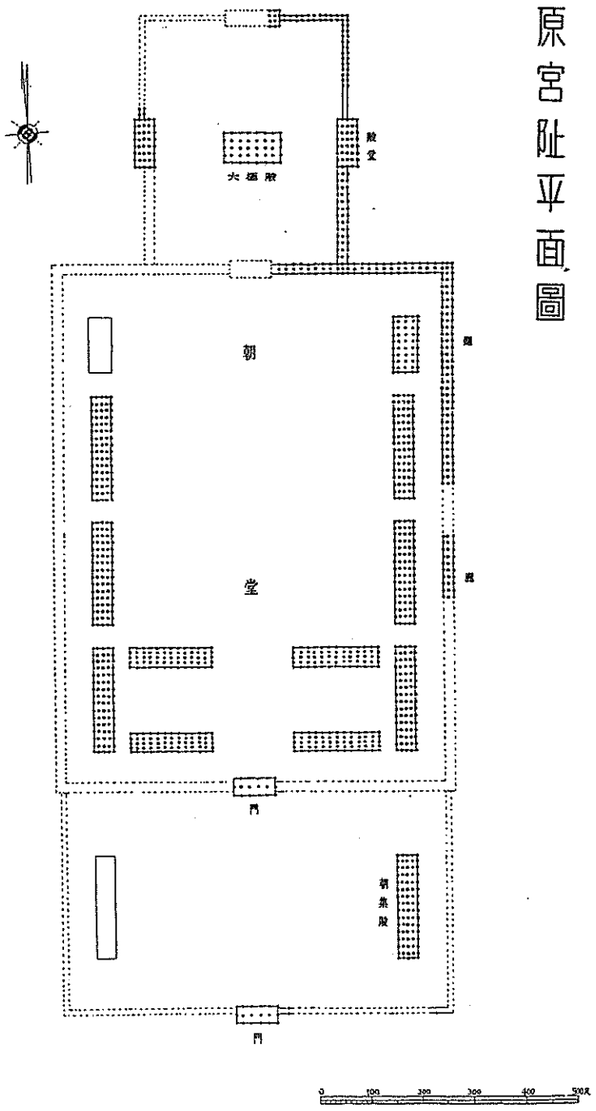
第20次調査遺構配置図（1:500）

間口７間は門としては異例の長さです。前期難波宮と大津宮の内裏南門がそうであることが知られているだけです。また、大極殿院の東門は平城宮など後の宮殿では確認されていません。大極殿と同じ性格をもつとされる前期難波宮の内裏前殿を囲む回廊に桁行５間の門があることは、都城の変遷過程での藤原宮の位置を示すものとして興味深いことです。

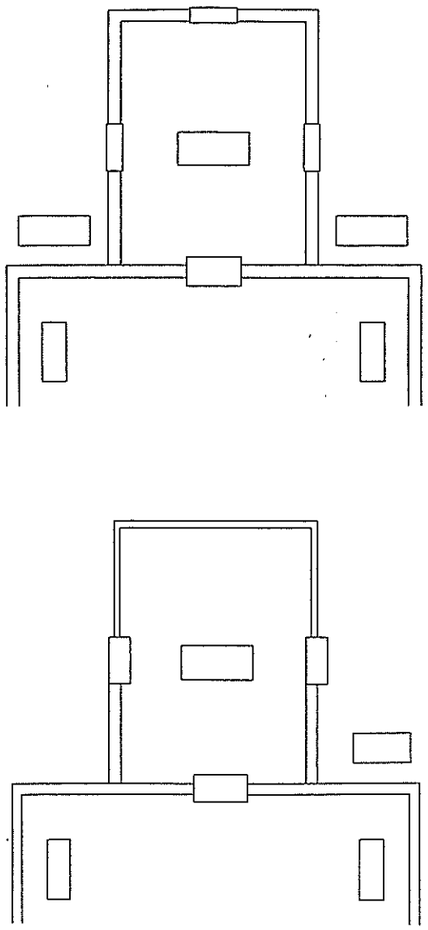
大極殿院は天皇の儀式空間であり、その南門については、天皇が出御して朝堂院に参集した官人と対する儀式の場でありますから、二層の屋根のある重厚な門であったでしょう。これに対して、東・西門は間口は広いですが、その構造からして棟が回廊よりも一段高い程度の門とみられます。大極殿院の威容を高める装飾的な門であるとともに、天皇が内裏外郭の施設、例えば東楼へ出る際の実用的な門でもあったと考えられるでしょう。

701	大宝元	1.1	天皇、大極殿に御しまして朝を受けたまふ。其の儀正門に烏形の幢を樹つ。左に日像・青龍・朱雀の幡、右に月像・玄武・白虎の幡なり。蕃夷の使者左右に陳列す。文物の儀、是に備れり。
		1.16	皇親及び百寮を朝堂に宴す。直広弐已上の者は、特に御器膳并せて衣・裳を賜ふ。楽しびを極めて罷む。
		6.11	王親及び侍臣を引きいて、西高殿に宴す。御器膳并せて帛を賜ふこと各差あり。
702	大宝２	1.1	天皇、大極殿に御しまして朝を受けたまふ。親王及び大納言已上、始めて礼服を着る。諸王臣已下は朝服を着る。
702	大宝２	1.15	群臣を西閣に宴す。五常太平楽を奏り、歓を極めて罷む。物賜ふこと差あり。
		12.29	西殿に殯す。
704	慶雲元	5.10	西楼の上に慶雲見はる。詔して天下に大赦し、元を改め慶雲元年としたまふ。
707	慶雲４	6.24	天皇（元明）、東楼に御しまして詔して、八省の卿及び五衛の督率等を召し、告るに遺詔によりて万機を摂る状を以てしたまふ。
		7.17	天皇（元明）、大極殿に位に即きたまふ。

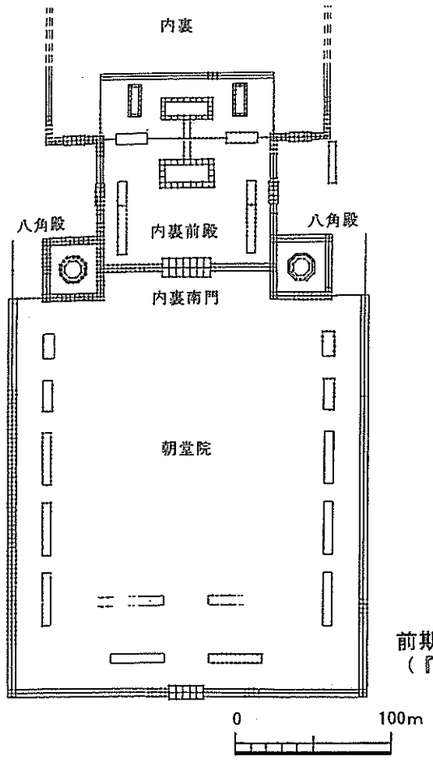
大極殿院復原図三種



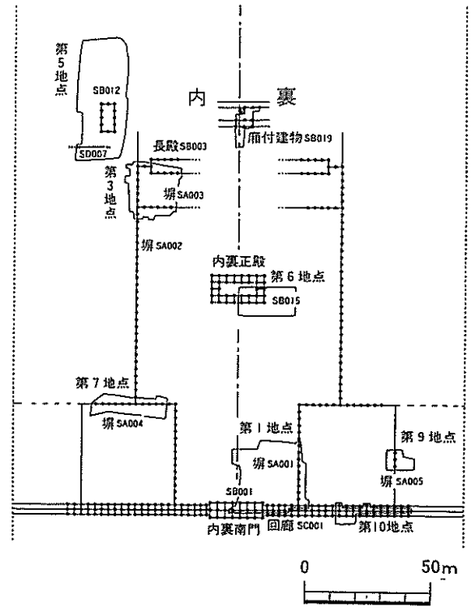
藤原宮址平面図



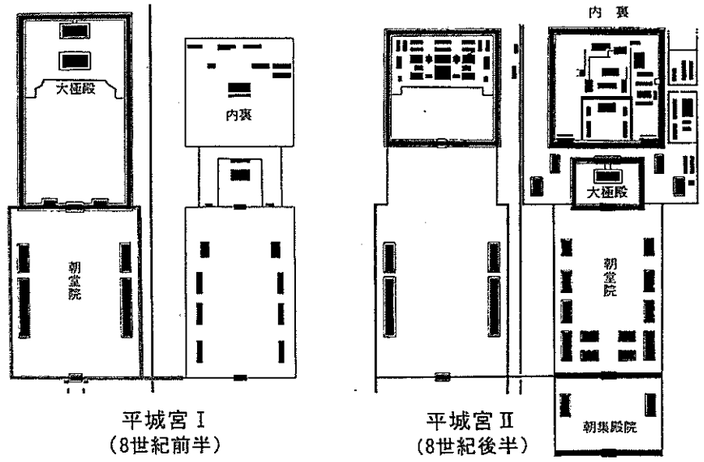
左：日本古文化研究所
『藤原宮址伝説地高殿の調査 二』
下：奈良国立文化財研究所
『飛鳥藤原調査概報 21　1991』
上：今回の復原案



前期難波宮（651－686）
（『遷都1350年記念特別展 難波宮』より）



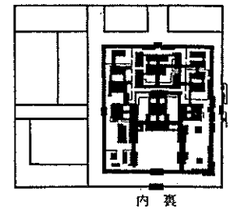
大津宮（667－672）
（『よみがえる大津京』より）

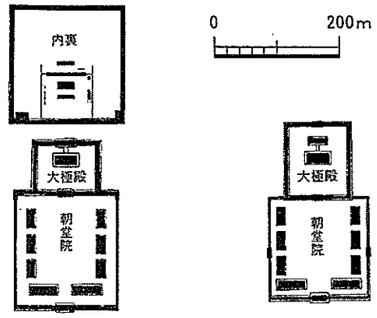


平城宮Ⅰ
（8世紀前半）

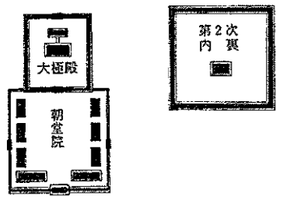
平城宮Ⅱ
（8世紀後半）

（『古代の宮殿と寺院』より）

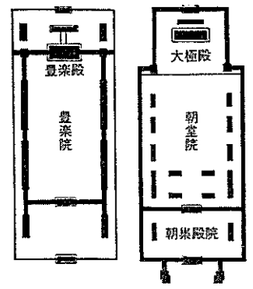




後期難波宮（726－784）



長岡宮（784－794）



平安宮（794－）